



雑誌編集者

中郡 暖菜氏

PROFILE 1986年千葉県生まれ。国立音楽大学在学中より『小悪魔ageha』編集部にてアルバイトとして勤務。2012年9月『LARME』（徳間書店）を創刊。当時26歳という若き編集長が担当した創刊号が即日重版したことで話題を呼ぶ。2016年に『LARME』編集長を退任し、2017年『bis』（光文社）の復刊を手がけ、同誌編集長に就任した。

甘く可愛い物語性、世界観を大切に。 時代を超えて、女性誌に「ギャル魂」を。

じっと授業を受けていられず 図書館で「本」と過ごした幼少期

編 若くして雑誌の編集長になられた中郡さんですが、どのような経緯で編集者を目指されたのでしょうか？

中郡 小さな頃から本が大好きで、親の話では、本当に物心つく前から好きだったらしいです。外で元気に遊ぶというよりも家の中でずっと本を読んでいるような子どもでした。家族の影響もあったと思います。家族全員、本を読むのが好きなので、さまざまなジャンルの本がたくさん家にあり、祖母が絵を描いていたこともあって、絵も好きだったので、とくに絵本に夢中でした。自分にとって本がかけがえのないものになったのは小学校に上がってから。私、教室でじっとしていられなくて、ちゃんと授業に出られないタイプだったんです。それで先生に手を焼かれ「教室にいない方がいいから、図書室にいて」と言われて…。そこでずっと本を読んで過ごしていました。本だけが自分の味方、という感じでしたね。他の人にとっての“普通”とか“常識”に、うまく合わせられないと言いますか。それは中学生になってからも変わらず、図書室通学の時期もあるなかでいろいろな本を読んでいるうちに、本をつく

る“編集者”という職業があることを知りました。そのとき「これだ!」って思ったんです。ちょうどその頃ギャルブームで、私もギャルに憧れて『Popteen』や『egg』といったファッション誌をよく読んでいて、ファッションやメイクにも興味を持ち始めていたので、どうせならファッション誌の編集者になろうと決めました。

編 でも、大学は文学系とか美術系ではなく、音大に行かれたんですね。

中郡 大学に進むときに、編集者になるための学校をいろいろ調べたのですが、ここでこう学べば編集者になれるという王道なコースはないとわかったんです。一応大学入学と同時に、マスコミ系の専門学校の編集学科にも、自分で学費を払ってダブルスクールで通って見ましたが、これじゃない感がすごくて、その専門学校はすぐに辞めました。ピアノを3歳から学んでいた流れで入った音楽高校からそのまま付属の音楽大学に進み情報を集めているうちに、「編集部にてアルバイトで潜り込んで編集者になる」という手があることを知りました。そして、あるとき『Hair&Make nuts』という雑誌の誌面で編集アシスタント募集の記事を見つけたんです。『Hair&Make nuts』というのは『小悪魔ageha』の前身なんですけど、一目

見たときから他と違う魅力のあるすごい雑誌で、絶対にこの雑誌で働きたいと強く思って、履歴書を送りました。出版社に対して私が履歴書を出したのは後にも先にもこの1回だけです。でもちょうど『小悪魔ageha』の創刊時期と重なって忙しかったのか、毎日連絡を待っていたのですが半年くらい音沙汰がなく、ある日いきなり電話があって、編集部に来てくださいと言われました。面接では、とにかく何としても編集者になりたい、『小悪魔ageha』が好きだということを強く訴えたのを覚えています。私は当時、ファッションや恋愛に関するブログを書いている、それがブログサイトの人気ランキングで1位だったりもしたんです。その前は、ケータイの待ち受け画像や発着信用の画像をつくる画像加工サイトを趣味で運営していて、これも結構人気がありました。そんな具体的な実績も挙げて「経験はないけれど自信はある」ということを懸命にアピールしたら「じゃあ明日から来て」とその場で採用になって(笑)。中学生時代からの夢が叶い、あこがれだった女性ファッション誌の編集部に入れてもらえることになりました。

病床の母に、自分が編集した本を贈りたい

編 『小悪魔ageha』は、強烈なインパクトを持ったファッション誌でしたね。編集部には、業界でも“カリスマ編集長”として注目されていた中條寿子さんがいました。

中郡 中條さんの影響は私にとってとても大きいです。中條さんは、それまで自分の中には「尊敬」という感情はないと思っていた私が、20歳を超えて、生まれて初めて「尊敬」の感情を抱いた方。私にとって尊敬というのは、「自分が目指す道の先を行っている人」に対するものだと思っているので、どんなに立派な大人に対してもそれまで一度も抱いたことのない感情でした。それが、中條さんに対しては、素直に、心から尊敬できると思えたんです。編集という仕事に対する妥協のなさ、つくる本の完成度の高さやこだわりが、本当にすごいんです。かと思うと、びっくりするぐらい自由なところのある人でもありました。それほど誰かを尊敬するというのは、それまでの自分の人生で唯一のことでした。

編 中條さんから中郡さんに対する接し方には、何か特別なところがあったのですか？

中郡 何よりも嬉しかったのは、小さい頃から“普通”とか“常識”とかにうまく合わせられなかった私の個性を認めてくださったことです。最初は学生アルバイトだったのでさすがにページを担当するなんてことはなかったのですが、社会人1年目の4月から早速自分の担当ページを持たせてくれて、企画もどんどん採用してもらえたんです。そして私が純粋にやりたいことを思い切りやらせてもらった、本当に幸せな時代だったと思います。

編 5年ほど編集部において、大きな転機が訪れたそうですね。
中郡 母が病気になってしまって。そのとき思ったのは“自分が編集長になってつくる『自分の本』を母へ贈りたい”ということでした。それで中條さんに相談したら応援してくださり会社もOKしてくれ、企画が進んでいきました。丸ごと一冊、自分の企画で本をつくるのは初めての経験でしたので不安はありましたが、中條さんが、どう準備すればいいか、どうつくっていけばいいか、そしてどのタイミングで出せばいいかというところまで具体的に相談に乗っていただきました。2012年の3月にagehaの姉妹誌として『LARME』という雑誌が出る予定になっていて、私がつくるagehaの最終号は2011年12月発売号になると言われていたんです。だからいままでの感謝を含めて精一杯気持ちを込めて最高の企画を最後につくったと思っていたのに、このタイミングで急に状況が変わってしまいました。

編 会社から路線の変更を言われたとか？

中郡 実はその頃ちょうど会社の組織が変わり、中條さんが10月頃に退職されたんですが、そうしたらなぜか『LARME』に対して突然ストップがかかってしまったんです。もうモデルにアポイントを取り始めていたし、会社と何度も話し合っただんですが平行線で…。それで最後は「だったら会社辞めます」と言って光の速さで退職しました。途中まで進めていた企画は別の出版社に持ち込むことにしました。それが『LARME』として2012年9月に新創刊されたわけです。



創刊1年で23万部を突破した ファッション絵本『LARME』

編 企画を持ち込むために、いくつかの出版社を回ったのですか？

中郡 当てが全くないまま、勢いで退職しちゃったので、出版社を一から回ろうと思って、最初に話をしに行ったのが徳間書店だったんです。当時、徳間書店には定期で出している女性誌がなかったので、女性誌の企画は通りやすいかなという期待もあり、とは言えお話しして実は一度断られたのですが、諦めずにアプローチしたら結果的には「やってみましょう」と言ってくれました。

編 創刊にあたって『LARME』のコンセプトはどんなものだったんでしょう。

中郡 私がつくりたいのはストーリー性や世界観があるファッション誌。『小悪魔ageha』のときから一貫してそういうものを得意としていて、しかも受けがよかったんです。読者だけでなく、出てくれるモデルの子にも喜んでもらっていました。『小悪魔ageha』は読者モデルが主ですし、キャバ嬢という職業柄、撮影にも遅刻してくる子が割と多かったんですけど、私の企画だと可愛いセットや凝った世界観の中で撮ってもらえるからって、みんな楽しみにして遅刻しないで来てくれたりしました(笑)。モデルたちが私の企画の撮影を楽しみにしてくれていることは、編集部内でも評判になるほどでした。だから『LARME』でも、ストーリー性や世界観には徹底的にこだわり“ファッション絵本”というコンセプトでやろうと決めていました。やはり子どもの頃から慣れ親しんでいた、さまざまな「物

語の世界」の影響が大きかったのだと思います。

編 『LARME』は創刊号から爆発的な売れ行きを見せましたね。

中郡 創刊号は発売初日に重版がかかりました。2号目も発売と同時に重版しましたし、創刊1年で23万部を超えていましたから、確かに売れ行きはよかったです。書店の方も注目してくれて、いろんな書店さんで大規模なフェアを企画してくださったり、いい感じに波に乗れたと思います。ただ、あの頃は雑誌が強烈なインパクトを持っていた最後の時代だったのかもしれない。いま同じような結果を出すのは、そうとう難しいでしょうね。

編 確かに現在はインターネットに押されて雑誌の力が少しずつ弱まってきている気がします。中郡さん自身は、雑誌の強みはどこにあると思いますか？

中郡 所有できるということですね。そこがWEBとは一番違うと思っています。WEBはみんなで共有する楽しさがあるけれど、本の形になっていると本当の意味で自分のものにできるわけです。お金を払って買った、自分だけのものになった本は“買って所有する”という満足感も含めて、手にしてくれた読者の方にさまざまな影響を与えられる大きな力を持っているんですね。情報の速さや手軽さなどの点ではインターネットにかなわないところがあるけれど、本にしかない価値が絶対にあるんです。だからこそ、所有していただくのにふさわしい意義のあるものをつくる必要がある。読み捨てられてもいいもの、付録がメインで中身は二の次というものなら、私は、つくらなくていいかなと思います。



私にとっては18~25歳の女の子が 一番自由で、一番面白い

編 『LARME』という雑誌と共に中郡さん自身も「大人気雑誌を創刊した26歳の若き編集長」ということで注目を浴びましたよね。

中郡 編集者としての自分が注目されて取材などを通じて露出していくことは、編集者という職業があることを知ってもらうという意味で大事だと思っています。カメラマンやスタイリストやライターが大勢いたとしても、企画を決め制作を進行する編集者がいなければ、本は完成しないわけですから。

編 中郡さんの場合は編集者の中でも、責任重大な「編集長」ですしね。

中郡 編集長というと、年配の方がやっているイメージがあると思うんですが、そうじゃなくて、20代でもやれる、やっている人がいると知ってもらうことで、自分にもできるんじゃないか、やってみたいと思う子が一人でも出てきたらいいなと思っていました。この世界からどんどん本が減ってしまい読まれなくなっていくなんてことは何としても避けたい、だから編集者の存在を広めたい、編集長の概念を壊したいという気持ちは、つねにありますね。

編 『LARME』の対象年齢はどれくらいを想定していましたか。

中郡 『小悪魔ageha』と同じように『LARME』も、対象年齢は18歳から25歳に絞っていました。私自身が、その年代のカルチャーにしか興味がないんです。18歳から25歳くらいは、女の子が一番自由な時期ですよ。25歳を過ぎると結婚を意識したり、すでにお子さんがいる方もいたりして、ファッションに対する自由度や優先する部分が変わってくる場合が多いと思います。逆に18歳以下だと学校や親や社会的な制約があり、なかなか自分で決められないことも多いじゃないですか。だから18歳から25歳の女性が私的には一番自由で、一番面白い。今後、自分の年齢が上がっていても、私には、25歳以上を対象にした雑誌をつくれる気がしません(笑)。

『LARME』でしか見られない モデルの意外な表情を引き出す

編 『LARME』の世界観として、少女っぽい、いわゆるガーリーな可愛らしさということがよく言われました。“可愛い”にも、いろいろあると思いますが。

中郡 私の考える“可愛い”は、甘めのテイストで、全面的に女の子らしさが出たもの。ずっと女子校育ちということもあり、基本的に、私のつくるものには男の人が存在していないんです。それはあえてやっているのではなく、本当に自然なこと。私自身、男の人の目線を意識して洋服やメイクを決

めることはありませんし。目指しているのは“女子受けする女子”という感じですね。その感覚が、コンサバ系のファッション誌にありがちな“男の人の価値観ありきのテンション”とは違う、甘く可愛い世界を生み出しているのではないかと思います。

編 モデルの女の子たちの撮り方にも独特なものがあり、『LARME』ならではの人気モデルも登場しました。

中郡 モデルの子に関しては、ある程度キャリアのある子もいたんですが、私は、他の雑誌では見られない表情を引き出すことを意識していました。

編 特別な表情の引き出し方、というのはあるんですか？

中郡 私は、新人の子でもすごく人気のある子でもできるだけ対等に接しています。機嫌をとって持ち上げるようなこともせず、対等な目線から仲良くなって、本当の意味でのコミュニケーションをとってあげれば、その子がどういう魅力を持っているかがわかってきます。彼女たちが撮影に慣れてくると、だんだん「このモデルはこの表情が基本」というイメージができてくるんですが、私は、彼女の中の“常識”から外れた「誰も見たことがないような顔」を引き出したいと思っています。そのとき大事なものは、本人が嫌じゃない形で引き出すこと。そうすると、雑誌をつくっている側のモデルも編集者も、見る側の読者も、みんなが楽しくなってくるんですよ。この雑誌でしか見られないモデルの姿というのは特別な価値だと思うし、読者の方はそんなところも楽しみにしてくれていたのではないかなと思っています。

人生のすべてを懸けてきた 『LARME』からの旅立ち

編 創刊から手塩にかけて育ててきた『LARME』ですが、およそ4年半で、編集部を離れることになりましたね。何か心境の変化などがあったのですか？

中郡 出版社の状況や体制が変わっていき、会社との間で話し合うケースが多くなっていく中で、簡単には納得できないような要求が、徐々に増えてきたんです。正社員という立場だったこともあり、会社側の要求にはできるだけ応えようと努力していたのですが…。同じ“物づくり”でも、本以外のものだと、フレキシブルに考えられるので洋服やコスメのコラボなど何でも楽しめたのですが、本づくりの方針に関しては、どうしても妥協できないラインがあり、本に命懸けだからこそ、なかなか譲歩できなかったんですよ。

編 編集部内も、重苦しい雰囲気になってしまったのではないですか？

中郡 『LARME』編集部は2年くらいずっと固定のスタッフでやっていたんですが、出版全体の不況の影響もあり多くの厳しい状況を目の当たりにして、いろんな場面で大人

の対応が上手にできない自分を責めることが多くなりました。思うに、私は『LARME』に人生を懸けすぎていたんですね。自分でコンセプトをつくって、名前もつけて、本当に何もなかったところからつくった本だったので…。辞めるという決断をするまでにはすごく悩みましたが、結局、出版社にすべてを譲り、退職することにしました。

『bis』の編集長に就任 WEBミックスの新たな可能性に挑む

編 退社後、複数の出版社から「新しい雑誌、本をつくってほしい」という連絡が入ったそうですね。『LARME』を立ち上げた編集長としての実績が、業界内でもそれだけ高く評価されていたということでしょう。いくつかの話の中から、なぜ『bis』の編集長をやってみようと思ったのですか？

中郡 光文社は、以前にも本をつくったことがある出版社でしたし、打ち合わせをさせていただくうちに、今回は一から名前をつけて新しい本をつくるより、もともと好きだった『bis』という雑誌を復刊させるという形で“大人のビジネス”に挑戦してみようと思ったんです。

編 『bis』の編集にあたっては、どのような方針を立てられたんですか。

中郡 まず考えたのは、WEBとの連動に力を入れることです。ここ2、3年、どうしても「インターネットと本」というテーマを避けて通れなくなってきました。読者層の女の子たちにヒアリングしていても、最近、急激に意識が変わってきているのを感じます。まず、雑誌を読まない。本屋さんそのものにな

くなってきているから、本屋さんに行く習慣もないし、本屋さんで好きな本を探すという習慣もない。明らかに、そういった子が増えています。情報に触れるのは、スマートフォン、インターネット経由がほとんど。そこで『bis』では、WEB版にもかなりの重点を置くことにしました。雑誌と連動していないオリジナルの企画も展開しています。とくにファッションの情報はインスタグラムと親和性が高いこともあって、『bis』はインスタグラムの人気が高いですね。

編 アクセス数も多いんですか？

中郡 はい。光文社はファッション誌の歴史が長く、とくに女性誌は何種類も発行されていて、対象年齢層も幅広くカバーしていて、どの本も固定のファンが多くなります。その中でまだ歴史も浅い『bis』が、光文社の雑誌全体の公式インスタグラムのアクセス数でトップになれたんですよ。

編 若い媒体ならではの強みでもありますね。

中郡 とは言え私自身の強みは、やっぱり本づくりにあるかなと思っています。特別な世界観や読みやすさなどを追求しながら1冊でも多くの本をつくりたい。ですが、いま編集者として最も興味があるのはWEBで、これからどんどん新たな可能性を探っていきたいと思っています。これまで雑誌編集者のつくるWEBは、めざましい成功を取めたという例がほとんどなくて、なかなかうまくいかないというのが定説なのですが、そこに挑戦してみたいですね。インターネットならではの魅力を活かして、柔軟な発想で独自のターゲットを掘り下げて、これまでと違う全く新しいタイプの編集者の形を定義したいと考えています。

